

# 三省堂版準拠

高等学校  
国語総合  
古典編 [改訂版]

# 学習課題ノート



ご採用  
見本  
ダイジェスト  
版

# 高等学校 国語総合 古典編「改訂版」学習課題ノート

## 目次

※ダイジェスト版には、★の教材を収録していません

一	説話	児のそら寝（宇治拾遺物語） 絵仏師良秀（宇治拾遺物語） 大江山（十訓抄）	2
二	物語	★竹取物語 かぐや姫の生い立ち／かぐや姫の成長 伊勢物語 芥川／東下り／筒井筒／梓弓／さらぬ別れ 徒然草 兼好法師	2
三	隨筆	つれづれなるままに／ある人、弓射ることを習ふに／ 丹波に出雲といふ所あり／亀山殿の御池に／ 名を聞くより／友とするにわるき者／ 九月二十日のころ／花は盛りに	
四	日記	土佐日記 門出／忘れ貝／帰京 平家物語 祇園精舎／木曾の最期 万葉集・古今和歌集・新古今和歌集	紀貫之
五	軍記	★奥の細道 旅立ち／那須野／白河／立石寺	松尾芭蕉 5
六	和歌	★俊頼髓腦 山吹の花 無名抄 ますほの薄 うひ山ぶみ	源俊頼 10 鴨長明 本居宣長
七	紀行		
八	評論		
一	漢文入門	漢文の世界へ 漢文の構造と訓読の仕方 成句・格言を読む 借虎威（戦国策） 蛇足（戦国策） 漁父之利（戦国策）	
二	故事成語	★朝三暮四（列子） ★管鮑之交（十八史略）	12
三	漢詩	漢詩 春曉／登鸛鵲樓／静夜思／ 江雪／送元二使安西／江南春／ 涼州詞／春望／臨洞庭／ 香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁／登高	13
四	史話	★先從隗始（十八史略） 臥薪嘗胆（十八史略） 晏子之御（史記） 鷄鳴狗盜（史記） 論語・孟子	司馬遷 14
五	思想		
六	文章	雜説 桃花源記	韓愈 陶潜
七	小説		



- 【四】次の——線部の助動詞の意味を、後からそれぞれ選び、記号で答えよ。
- ① 帳の内よりも出ださず、(20・5) ( )
  - ② 秋田を呼びてつけさす。(20・13) ( )
  - ③ なよ竹のかぐや姫とつけつ。(20・13) ( )
- ア 完了 イ 存続 ウ 打消 エ 使役

【五】「三月ばかりになるほどに、よきほどなる人になりぬ」(20・2)とは、どういふことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア あと三か月ほど養えば子どもから大人になるということ。  
 イ 三月になるとちょうどよい大きさに成長したということ。  
 ウ 三か月ほどで一人前の背丈の人になったということ。  
 エ 子どもの背丈になるのに三か月かかったということ。

【六】「屋の内は暗き所なく光満ちたり。」(20・7)とは、どのような様子を表しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 翁の家が裕福になり、部屋の間々まで飾られている様子。  
 イ かぐや姫が清らかで美しいので、家の中が明るい様子。  
 ウ 翁の家では心配事などなく、皆が幸せに暮らしている様子。  
 エ かぐや姫の家の人々は、いつも明るく笑っている様子。

【七】「かぐや姫の成長」の場面の翁の生活はどのようなものか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 野山に分け入って竹を取り、いろいろなことに使って暮らしていた。  
 イ かぐや姫を大切に育てることに夢中で、仕事が手につかなかった。  
 ウ 黄金が入った竹を長期間見つけて勢力のある者になっていた。  
 エ 暮らしが楽になり、毎日宴会を開いて遊んで過ごしていた。

### 紀行 奥の細道

教科書 P.79 ~ P.86

語句・文法を理解し、内容を読み取ろう

【旅立ち】

【一】次の語句の読みを現代仮名遣いで答えよ。

- ① 百代の過客 ( )
- ② 去年 ( )
- ③ 庵 ( )

【二】次の——線部の語句の意味を答えよ。

- ① 百代の過客にして、(79・1) ( )
- ② やや年も暮れ、(79・5) ( )
- ③ 灸据うるより、(79・7) ( )
- ④ 住み替はる代ぞ(80・2) ( )
- ⑤ 弥生も末の七日、(80・4) ( )
- ⑥ 空朧々として、(80・4) ( )
- ⑦ 光をさまれるものから、(80・4) ( )
- ⑧ むつまじき限りは(80・6) ( )

【八】「男はうけきらはず呼び集へて、」(21・2)について、次の問いに答えよ。

- (1) どのような人を「うけきらは」なかったのか。古文中から抜き出せ。  
 「 」と「 」

(2) 男たちをこのように呼び集めた目的は何か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かぐや姫の結婚相手としてふさわしい人を探すため。  
 イ いろいろな遊びをしてかぐや姫を楽しませるため。  
 ウ かぐや姫の名付け親である秋田にお礼をするため。  
 エ 盛大な宴会を開くことで、翁の勢力を見せつけるため。

#### 難

【九】「いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがな」(21・3)を、わかりやすく口語訳せよ。

#### 入試

【十】「苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。」(20・9)の——線部と同じ意味のものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 暁より雨降れば、同じ所に泊まれり。(土佐日記)
- イ 牛飼童を打てば、童は牛を棄てて逃げぬ。(今昔物語集)
- ウ 悪人の真似とて人を殺さば、悪人なり。(徒然草)
- エ 命長ければ恥多し。(徒然草)

【三】「舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者」(79・1)とは、どういう人のことか。

【四】①「片雲の風に誘はれて、」(79・3)、②「春立てる霞の空に、」(79・5)をわかりやすく口語訳せよ。

- ① 「 」
- ② 「 」

【五】「江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、」(79・4)とは、どのようなことを表しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 長い間旅に出ていて久しぶりに家に戻ってきた。  
 イ 世間から隔絶したような場所に住むことにした。  
 ウ 長年住み続けていた家を人に譲ることにした。  
 エ 旅先でたまたま見つけた家に仮住まいしていた。

【六】次の語句と対句的表現になっている語句を本文中から抜き出せ。

- ① 行きかふ年(79・1) ( )
- ② そぞろ神(79・6) ( )

【七】作者が奥州への旅の準備として行ったことを具体的に説明せよ。

「 」

【八】「草の戸も…」(80・2)の句の解釈として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 狭い草庵を出て身を寄せる先は意外にも立派な家であったことよ。
- イ この草庵に新たに住む人のためにせめて雛飾りくらいしておこう。
- ウ わびしい草庵だが新しい住人を迎えれば賑やかな家になるだろう。
- エ 私が一人で暮らした草庵に子どもが多い家族が住み始めていたよ。

【九】「またいつかは」(80・5)を、口語訳せよ。

【十】「行く春や…」(80・9)の句にこめられた心情を説明せよ。

【十一】この文章の構成を説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 前半では先人の例を引きながら旅の魅力やその準備について語り、後半では出発の日の人々との別れの場面を客観的に描写している。
- イ 前半では今回の旅を決めるに至った経緯が語られ、後半では出発の場面が旅立つ側と見送る側の視点に立って重層的に描かれている。
- ウ 前半では旅へのあこがれや旅立ちを前にして浮き立つ気持ち語られるが、後半では、長旅への不安や別れの寂しさが強調されている。
- エ 前半では旅に対する自身の価値観や今回の旅の目的を明らかにし、後半では旅の始まりを時間の経過に沿って情緒豊かに表現している。

【那須野】  
【一】次の——線部の語句の意味を答えよ。

- ① 一村を見かけて行くに、(82・3) ( )
  - ② さすがに情け知らぬにはあらず。(82・8) ( )
  - ③ 名のやさしかりければ、(83・2) ( )
  - ④ やがて人里に至れば、(83・4) ( )
- 【二】次の——線部の語を文法的に説明せよ。
- ① 情け知らぬにはあらず。(82・8) [ ]
  - ② 貸し侍りぬ。(82・13) [ ]
  - ③ 八重撫子の名なるべし(83・3) [ ]

【三】次の——線部の助詞「の」のうち、他と意味が異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア うひうひしき旅人の道踏み違へん。(82・10) [ ]
- イ この馬のとどまる所にて馬を返し給へ。(82・12) [ ]
- ウ 聞き慣れぬ名のやさしかりければ、(83・2) [ ]
- エ かさねとは八重撫子の名なるべし(83・3) [ ]

入試

【十二】次の——線部と文法的に同じものをあとからそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ① 老いを迎ふる者は、(79・2)
- ② 光をさまれるものから、(80・4)

- ア 雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる。(枕草子)
- イ 寒げく澄める二十日余りの空こそ、心細きものなれ。(徒然草)
- ウ 見ざらん世までを思ひ掬てんこそ、はかなかるべけれ。(徒然草)
- エ 「…入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。(土佐日記)
- オ 内裏造らるるにも、必ず、作り果てぬ所を残すことなり。(徒然草)

入試

【十三】「古人も多く旅に死せるあり。」(79・3)について、次の問いに答えよ。

- (1) 次の作品に関係の深い「古人」の名前をそれぞれ答えよ。  
① 世にふるも更に時雨のやどり哉 ( )
  - ② 夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。( )
  - ③ 願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ ( )
  - ④ 江碧にして鳥いよいよ白く、山青くして花然えんと欲す。( )
- (2) 芭蕉自身も旅先で死んだが、最後に次のような句を詠んでいる。空欄に適切な言葉を書き入れよ。  
( ) ( ) に病で夢は ( ) ( ) をかけ廻る

【四】「草刈る男に嘆き寄れば、」(82・7)とあるが、男に何を話したと考えられるか。説明せよ。

【五】「いかかすべきや。」(82・9)について次の問いに答えよ。

- (1) 口語訳せよ。 [ ]
- (2) このとき男はどのようなことを考えていたのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。  
ア 見ず知らずの旅人の言うことを信用するのは危険だ。  
イ 自分が案内してやればよいのだが今は手が離せない。  
ウ 旅人がこんな野の真ん中を歩いているのはおかしい。  
エ 馬を貸してやりたいが返してもらうことができない。

【六】「うひうひしき旅人の道踏み違へん。」(82・10)を口語訳せよ。

【七】「あやしう侍れば、」(82・11)の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 私のことが信用できないようでしたら、 [ ]
- イ 私はあなた方より身分が低いですから、 [ ]
- ウ あなた方が無事に着くか心配ですので、 [ ]
- エ どこに行き着くかはわかりませんので、 [ ]

入試

【八】「二人は小姫にて、」(83・1)の——線部と同じ意味のものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 女声にて、「よきこと。宿り給へ」と言へば、(宇治拾遺物語)

イ 長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、目安かるべけれ。

(徒然草)

ウ まことにて名に聞く所羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがな

(土佐日記)

エ 耳をたててよく聞けば、わが妻にてありし人の気配に聞きなしつ。

(今昔物語集)

【白河】

【二】次の——線部の語句の意味を答えよ。

① 心もとなき日数重なるままに、(84・1) ( )

② 便り求めしも理なり。(84・2) ( )

③ 風騒の人、(84・2) ( )

【三】次の——線部の「し」のうち、他と文法的な意味が異なるものをつ選び、記号で答えよ。

ア 「いかで都へ」と便り求めしも理なり。(84・1)

イ 秋風を耳に残し、紅葉を面影にして、(84・3)

ウ 古人冠を正し衣装を改めしことなど、(84・5)

エ 清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。(84・5)

【三】作者が「白河の関」(84・1)に到着したときの季節を漢字一字で答えよ。

【四】「白河の関にかかりて旅心定まりぬ。」(84・1)とあるが、このときの作者の心境として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 無事に白河の関へたどり着き、旅の成功を感じて安心した。

イ 白河の関に到着し、やっと落ち着いて旅する気持ちになった。

ウ 白河の関を見たことで、奥州を旅することへの迷いが消えた。

エ 今回の旅では、まず白河の関を訪ねてみようかと決心した。

【五】「いかで都へ」(84・1)について、次の問いに答えよ。

(1) 「いかで都へ」を、述語を補って口語訳せよ。

(2) この歌にこめられた心情として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 都への連絡手段がないことへの悲嘆。

イ 白河の関を取り巻く自然の美しさへの賛美。

ウ 白河の関を越え、異国の地へ入った感動。

エ もう二度と都へは戻れまいという絶望。

オ 都から遠く離れた地にいることへの感慨。

(3) この歌に対する「奥の細道」の作者の思いが最もよく表されている言葉を、本文中から三字で抜き出して書け。

【二】次の——線部の動詞の活用の種類を答えよ。

① 勧むるによりて、(85・2) ( ) 活用( )

② 土石老いて、(85・4) ( ) 活用( )

③ 仏閣を拜し、(86・2) ( ) 活用( )

【三】「その間」(85・3)とは、何と何の間のことか。

【四】「七里」(85・3)は、約何キロメートルか。

【五】「山上の堂に登る。」(85・3)とあるが、険しい山道を行く様子がかがえる表現を本文中から抜き出せ。

【六】「閑かさや…」(86・5)の句が表している情景として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 頭上から降りそそぐ蟬の声が岩に吸収されたかのように、時折、何の音も聞こえない瞬間が訪れる。

イ 岩山には蟬の声が響き渡っているにもかかわらず、それを包み込むような深い静寂が感じられる。

ウ 日が暮れて、日中さかんに鳴いていた蟬の声もすっかり止み、辺りは夕闇と静寂に包まれている。

エ 切り立った岩山の上にある寺には山里で鳴く蟬の声も届くことなく、ひっそり静まり返っている。

評論

俊頼髓脳 山吹の花

教科書 P.88 ~ P.89

語句・文法を理解しよう

【一】次の——線部の語句の本文中での意味を答えよ。

① もとよりや、まうけたりけむ、(88・3) ( )

② 恥ぢがましかりけることかな。(89・1) ( )

③ なかなか、久しく思へば、(89・3) ( )

【二】次の——線部の係助詞に対応する結びの言葉を指摘し、係り結びの意味として適切なものを後からそれぞれ選び、記号で答えよ。

① ただに過ぐるやうやある。(88・2) ( )

結びの語 ( ) 意味

② もとよりや、まうけたりけむ、(88・3) ( )

結びの語 ( ) 意味

③ とこそ、付けたりけれ。(88・9) ( )

結びの語 ( ) 意味

④ とぞ、仰せられける。(89・1) ( )

結びの語 ( ) 意味

ア 疑問 イ 強意 ウ 反語 エ 比喩

【三】次の——線部をわかりやすく口語訳せよ。

① 若き人々、え取らざりければ、(88・5) ( )

② 大輔なからましかば、恥ぢがましかりけることかな。(88・9) ( )

【四】次の——線部の敬語の種類と動作主をそれぞれ答えよ。

① 伊勢大輔が候ひけるを、(88・5) ( )

敬語の種類 「 」 動作主 「 」

② 宮の仰せられければ、承りて、(88・6) ( )

敬語の種類 「 」 動作主 「 」

③ とぞ、仰せられける。(89・1) ( )

敬語の種類 「 」 動作主 「 」

文章の内容を読み取ろう

① 「さるめでたきもの」(88・2)とは、何のことか。本文中から抜き出して書け。 ( )

② 「くちなしにちしほやちしほそめてけり」(88・4)の歌について、次の問いに答えよ。

難

⑤ 本文中における筆者の考えについて、次の問いに答えよ。

(1) 筆者は、歌を詠むときにはどのようなことに留意すべきだと述べているか、二十字以内で説明せよ。

Table with 2 columns and 5 rows for answer 5(1).

(2) 「心疾き」人が、(1)のことを守らないと、どのようなことが起こるか。本文の内容に即して具体的に説明せよ。

Table with 2 columns and 5 rows for answer 5(2).

入試

⑥ 次の説明にあてはまる、和歌の表現技法に関する言葉を後からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ① 有名な古歌の一部を取り入れて歌を詠むこと。
② 五音以上からなり、ある任意の語句を導き出す。
③ 歌の中で中心となる言葉と関連をもっている言葉。
④ 同音異義語を用いて一つの語に複数の意味をもたせる。
⑤ 原則五音からなり、ある特定の語を導き出す。

ア 掛詞 イ 枕詞 ウ 縁語 エ 序詞 オ 本歌取り

①  ②  ③  ④  ⑤

④ 「これらを思へば、心疾きも、かしこきことなり。」(89・2)とあるが、「心疾き」とは、ここではどのようなことを表しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア 短時間で大量の歌を詠むこと。
イ せっかちな性格であること。
ウ 素早い発想で歌を詠むこと。
エ 頭がよくて機転がきくこと。

故事成語 朝三暮四

教科書 P.114 ~ P.115

語句・句形を理解し、内容を読み取ろう

【一】次の語句の本文中での読みを、歴史的仮名遣いで記せ。

- ① 能<sup>ク</sup> ( ) (ク) ② 亦 ( ) ( )
- ③ 俄<sup>カニシテ</sup> ( ) (カニシテ) ④ 先<sup>ッ</sup> ( ) ( )
- ⑤ 与<sup>フル</sup> ( ) (フル) ⑥ 若 ( ) ( )
- ⑦ 乎 ( ) ( ) ⑧ 若 ( ) ( )

【二】次の語句の本文中での意味を答えよ。

- ① 俄<sup>カニシテ</sup> (114・2) ( )
- ② 若 (114・4) ( )

【三】「能解<sup>ク</sup>狙<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>、狙<sup>モ</sup>亦<sup>タ</sup>得<sup>タリ</sup>公<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>。」(114・1)とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 公と狙の間には信頼関係が築かれていた。
- イ 公と狙は強い友情で結ばれ仲間意識があった。
- ウ 公と狙は親子のような親密な関係だった。
- エ 公と狙は互いに反目して腹を探り合っていた。

【四】「焉<sup>ニ</sup>」(114・3)の本文中での働きとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 反語 イ 強調
- ウ 詠嘆 エ 疑問

【五】「將<sup>マ</sup>限<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>食<sup>ヲ</sup>。」(114・3)について、次の問いに答えよ。

- ① 全て平仮名の書き下し文にせよ。

② この行動の理由を説明せよ。

【六】「誑<sup>アホクシキ</sup>」(114・3)について、次の問いに答えよ。

- ① 四字以内で口語訳せよ。
- ② なぜ、このようなことをしたのか、理由を説明せよ。

【七】「与<sup>フル</sup>若<sup>ニ</sup>茅<sup>ヲ</sup>、朝<sup>ト</sup>三<sup>ニ</sup>而<sup>シテ</sup>暮<sup>ス</sup>、四<sup>ニ</sup>足<sup>ル</sup>乎<sup>ト</sup>。」(114・4)の口語訳として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア おまえたちにとちの実をやるのに、明日は三つにして今夜は四つにしたら、足りるか。
- イ おまえたちからとちの実をもらうのに、明日は三つにして今夜は四つにしたら、足りないか。
- ウ おまえたちにとちの実をもらうのに、朝は三つにして夕方は四つにしたら、足りないか。
- エ おまえたちにとちの実をやるのに、朝は三つにして夕方は四つにしたら、足りるか。

【八】「朝三暮四」とはどのような意味で用いられる言葉か。「狙公」と「狙」の立場から考えてそれぞれ記せ。

- 狙公
- 狙

故事成語 管鮑之交

教科書 P.116 ~ P.117

語句・句形を理解し、内容を読み取ろう

【一】次の語句の本文中での読みを、歴史的仮名遣いで記せ。

- ① 字 ( ) ( ) ② 嘗<sup>テ</sup> ( ) ( )
- ③ 自<sup>ラ</sup> ( ) ( ) ④ 与<sup>テ</sup> ( ) ( )
- ⑤ 以<sup>テ</sup> ( ) (テ) ⑥ 謀<sup>リ</sup> ( ) ( )
- ⑦ 曰<sup>ハク</sup> ( ) (ハク) ⑧ 也 ( ) ( )

【二】次の語句の本文中での意味を答えよ。

- ① 字 (116・1) ( )
- ② 嘗<sup>テ</sup> (116・1) ( )
- ③ 貪 (116・2) ( )
- ④ 走<sup>ル</sup> (116・3) ( )

【三】「嘗<sup>テ</sup>与<sup>テ</sup>鮑<sup>ノ</sup>叔<sup>ヲ</sup>賈<sup>ス</sup>」(116・1)について、次の問いに答えよ。

- ① 書き下し文にせよ。
- ② 誰と誰が何をしたのかを明らかにして口語訳せよ。

【四】「鮑叔不以為愚」(116・2)は、「はうしゆくもつてぐとなさず」と読む。読みを参考にして、訓点をつけよ。

鮑叔不以為愚

【五】「鮑叔不以為怯」(116・3)とあるが、鮑叔が管仲を臆病者だと思わなかった理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 無謀に敵に向かっていくよりも、退くほうがよい場合もあるから。
- イ 管仲のような大人物にとっては、目先の勝敗は問題ではないから。
- ウ 管仲には世話をすべき老いた母親がいることを知っていたから。
- エ 老いた両親から、管仲の命を守ってほしいと頼まれていたから。

【六】「生<sup>ム</sup>我<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>父母<sup>ニ</sup>、知<sup>ル</sup>我<sup>ヲ</sup>者<sup>ハ</sup>鮑<sup>ノ</sup>子<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>。」(116・4)について、次の問いに答えよ。

- ① 口語訳せよ。
- ② この言葉は管仲のどのような心境を表しているか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 自分を生んだ父母よりも、自分の真の理解者である鮑叔のほうが偉大だ。
- イ 父母が自分を生んでくれたので、自分を理解してくれる鮑叔と出会えた。
- ウ 自分を生んでくれた父母と同様に、自分を理解してくれる鮑叔は大切な人だ。
- エ 父母によってこの世に生まれ、鮑叔に理解されたことで、私は世の中で活躍できるのだ。

史話 先従隗始

教科書 P.130 P.131

語句・句形を理解し、内容を読み取る。

【一】次の語句の本文中での読みを、歴史的仮名遣いで記せ。

- ① 為<sub>ス</sub> ( ) ② 以<sub>テ</sub> ( )
- ③ 因<sub>リテ</sub> ( ) ④ 与<sub>ニ</sub> ( )
- ⑤ 共<sub>ニ</sub> ( ) ⑥ 雪<sub>ツ</sub> ( )
- ⑦ 視<sub>ス</sub> ( ) ⑧ 事<sub>ル</sub> ( )
- ⑨ 古<sub>ク</sub> ( ) ⑩ 使<sub>ムル</sub> ( )
- ⑪ 且<sub>ツ</sub> ( ) ⑫ 況<sub>ンヤ</sub> ( )
- ⑬ 先<sub>ッ</sub> ( ) ⑭ 豈<sub>ニ</sub> ( )
- ⑮ 於<sub>テ</sub> ( ) イテ ( )

【二】次の語句の本文中での意味を答えよ。

- ① 卑<sub>ク</sub>辞<sub>ヲ</sub> (130・5) ( )
- ② 因<sub>リテ</sub> (130・5) ( )
- ③ 報<sub>スル</sub> (130・6) ( )
- ④ 誠<sub>ニ</sub> (130・6) ( )
- ⑤ 視<sub>ス</sub> (130・7) ( )
- ⑥ 得<sub>ン</sub> (131・1) ( )
- ⑦ 致<sub>ス</sub> (131・5) ( )
- ⑧ 師<sub>事</sub> (131・6) ( )

【三】「孤極<sub>メテ</sub>知<sub>ル</sub>燕<sub>ノ</sub>小<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>足<sub>ラ</sub>以<sub>テ</sub>報<sub>スル</sub>」(130・6)について、次の問いに答えよ。

【五】「先生」(130・7)、「之」(131・1)は誰のことを指しているか。本文中から抜き出して記せ。

先生 [ ] 之 [ ]

【六】「買<sub>ヒテ</sub>死<sub>マ</sub>馬<sub>ノ</sub>骨<sub>ヲ</sub>五百<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>返<sub>ル</sub>」(131・3)について、次の問いに答えよ。

① 「君怒<sub>ル</sub>」とあるが、その理由を説明せよ。

② 「買<sub>ヒテ</sub>死<sub>マ</sub>馬<sub>ノ</sub>骨<sub>ヲ</sub>五百<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>返<sub>ル</sub>」の行動の理由にあたる部分を本文中から白文で抜き出し、理由を説明せよ。

理由にあたる部分  
理由の説明

【七】「馬<sub>ニ</sub>至<sub>ラント</sub>矣<sub>」</sub>(131・4)の「矣」と同じ働きをもつ助字が用いられている文を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 朝<sub>アヒタニ</sub>聞<sub>カバ</sub>道<sub>ヲ</sub>夕<sub>ニ</sub>死<sub>ストモ</sub>可<sub>ナリ</sub>矣<sub>」</sub>
- イ 何<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>別<sub>カク</sub>乎<sub>」</sub>
- ウ 是<sub>レ</sub>何<sub>ノ</sub>楚<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>之<sub>ヒト</sub>多<sub>キ</sub>也<sub>」</sub>
- エ 夫<sub>ヲ</sub>子<sub>シ</sub>道<sub>ハ</sub>忠<sub>ウ</sub>恕<sub>ヒト</sub>而<sub>レ</sub>已<sub>ミ</sub>矣<sub>」</sub>

① 書き下し文にせよ。

② 口語訳として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

- ア 私は、燕が弱小な国であるために、報復すれば簡単に滅ぼすことができることを十分知っている。
- イ 私は、燕が領土の小さい国であるために、斉に報いるだけの価値がないことを十分知っている。
- ウ 私は、自分の国より燕のほうが弱小であるために、討つには物足りないことを十分知っている。
- エ 私は、自分の国が弱小であるために、斉に報復するだけの力がないことを十分知っている。

【四】「有<sub>リテ</sub>下<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>金<sub>ヲ</sub>使<sub>シ</sub>涓<sub>人</sub>求<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>里<sub>ノ</sub>馬<sub>ノ</sub>者<sub>」</sub>(131・2)について、次の問いに答えよ。

- ① 書き下し文として最も適切なものを次の中から一つ選べ。  
ア 涓人をして千金を求め千里の馬を以てしむる者有り。  
イ 千金を以て涓人をして千里の馬を求めしむる者有り。  
ウ 千金を以て涓人をして求め千里の馬をしむる者有り。  
エ 涓人をして千里の馬を以て千金を求めしむる者有り。
- ② 口語訳せよ。

③ この文の「使」と同じ意味の表現が含まれている文を次の中から一つ選べ。

- ア 不<sub>レ</sub>敢<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>告<sub>」</sub>
- イ 不<sub>レ</sub>若<sub>カ</sub>人<sub>有<sub>ニ</sub>其<sub>宝</sub>」</sub>
- ウ 召<sub>シテ</sub>儒<sub>臣</sub>講<sub>レ</sub>書<sub>」</sub>
- エ 松<sub>柏</sub>摧<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>薪<sub>」</sub>

【八】「先<sub>ツリ</sub>隗<sub>始</sub>。況<sub>ニ</sub>賢<sub>ナル</sub>於<sub>隗</sub>者<sub>、</sub>豈<sub>ニ</sub>遠<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>里<sub>ノ</sub>哉<sub>」</sub>(131・5)について、次の問いに答えよ。

① 「隗」と「賢<sub>ナル</sub>於<sub>隗</sub>者」は、「古之君」で始まる郭隗の話の中では何にたとえられているか、それぞれ記せ。

隗 [ ] 賢<sub>ナル</sub>於<sub>隗</sub>者 [ ]

② 「先<sub>ツリ</sub>隗<sub>始</sub>。」とはどういうことか、具体的に説明せよ。

③ 「況<sub>ニ</sub>賢<sub>ナル</sub>於<sub>隗</sub>者<sub>、</sub>豈<sub>ニ</sub>遠<sub>ニ</sub>千<sub>ニ</sub>里<sub>ノ</sub>哉<sub>」</sub>を、句形に留意して口語訳せよ。

【九】「於<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>士<sub>争</sub>趨<sub>レ</sub>燕<sub>」</sub>(131・7)とはどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 周辺国の兵士たちが、燕を滅ぼそうとして攻め入ってきたということ。
- イ 戦いに疲弊した兵士たちが、住み心地のよい燕に移住してきたということ。
- ウ 賢者たちが、燕の力になろうと先を争って燕にやってきたということ。
- エ 賢者たちが、隗を陥れようとして我先にと燕にやってきたということ。

## 【かぐや姫の生い立ち】

## 【解答】

- 【一】 ①おきな ②め ③おうな  
 【二】 ①さまさま ②不思議に思う  
 ③かわいらしい ④しだいに  
 【三】 ①(1)ある (2)ワ行上一段 (3)連用  
 ②(1)おはす (2)サ行変格 (3)連体  
 ③(1)く (2)カ行変格 (3)連用  
 【四】 ①エ ②ウ ③オ ④イ ⑤ア  
 【五】 (例)断定の助動詞「なり」の連体形「なる」に、推量の助動詞「めり」の終止形が接続した「なめり」の撥音便「なんめり」の「ん」を表記しない形。  
 【六】 さぬきの造  
 【七】 竹の中におはする・手にうち入れて・籠に入れて養ふ(順不同)  
 【八】 (1)エ (2)例自分が朝晩目になっている竹の中にかくら。  
 【九】 イ  
 【十】 (例)根もとが光っている筒の中を見ると、三寸ほどの大きさの人が、たいそうかわいらしい様子で座っていた。  
 【解説】  
 【一】 ③時代とともに「おみな」↓「おむな」↓「おうな」と音が変化した。  
 【二】 ③形容詞「うつくし」の連用形「うつくしく」

【八】 (1)例貴なる(と) いやしき

(2)ア

【九】 (例)どうにかしてこのかぐや姫を手に入れたいものだ、妻にしたいものだ

【十一】エ

## 【解説】

【一】 ①ものの良し悪しを表す言葉としては、評価の高いほうから「よし・よろし・わろし・あし」がある。

【二】 ①顔かたちのこと。③管弦を楽しむ意で使われることが多いが、ここでは「よろづの遊び」をしたとある。⑤「貴なる」と対比されている。⑥まだ見ぬかぐや姫に恋い焦がれて心乱れるのである。

【三】 ①形容詞で、基本形は「よし」。②「する」の意で、基本形は「す」。③形容詞の活用の種類は、ナリ活用とタリ活用の二種類。

【四】 ①「〜ない」の意。②「〜させる」の意。使役の助動詞には「す」と「さす」があるが、前者は未然形がア段音になる四段・ナ変・ラ変活用の動詞に、後者はそれ以外の動詞に接続する。

【五】 「よきほど」とは、背丈が一人前ぐらいであること。直前の「すすくと大きになりまさる」もあわせて考える。

【六】 この文は、「この児のかたち」を説明したものである。清らかで美しいかぐや姫の容姿が、周囲を明るく照らしている。

【七】 「翁、竹を取ること久しくなりぬ。勢ひ猛の者になりにけり。」(20・12)とあり、黄金が入った竹を長期間取ったので、富豪になり、勢力のある

がウ音便化したもの。

【三】 ②漢字で書くと「御座す」。ここでは「あり・をり」の尊敬語。「おはする(こと)にて知りぬ」と後に体言を補える。

【四】 ②「〜ている」の意で、ある状態が続いていることを表す。③「〜である」の意。④「なめり」は「なるめり」が変化した形。断定の助動詞「なり」+推量の助動詞「めり」。

【五】 ラ変型に活用する語の連体形「ある」「なる」などに、推量の助動詞「めり」「べし」や、伝聞・推定の助動詞「なり」が続くとき、撥音便化して「あんめり」「なんめり」などと発音する。表記するときには「ん」は書かずに「あめり」「なめり」などとなる場合がある。「ん」の音を表す仮名がなかったことなどによる。

【六】 翁の仕事について説明したあとに、「名をば、(18・2)と、名前をあげている。

【七】 「三寸」は約十センチメートル。それゆえに、「竹の中におはする」(18・5)ことができ、「手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ」(18・6)ということができたのである。「籠に入れて養ふ」(18・7)のもやはり小さいためである。

【八】 直前に理由を表す格助詞「にて」がある。翁は野山で竹を取ることを仕事としているので、竹は朝晩(毎日、常に)目にするものである。その竹の中にいたので、自分が発見した。だから、自分の子になるのが必然だと考えたのである。

【九】 直前に「かくて」とあり、前に書かれていることが理由で翁が豊かになったのだとわかる。「よごと」に、黄金ある竹」を見つけることが「重なり

者となることがわかる。

【八】 (1)身分の違いで分け隔てをしなかったのである。  
 (2)一人前となったかぐや姫の結婚相手を探す目的があつたのだと考えられる。

【九】 「しがな」は自己の願望を表す終助詞。「いかに」は願望表現と呼応して「どうにかして」という意味を表す。動詞「見る」は、ここでは男性が女性を妻とすることを表す。

【十】 接続助詞「ば」の用法を捉える。  
 未然形+ば ↓仮定条件(もし〜ならば) …ウ  
 已然形+ば ↓偶然条件(〜と) …イ  
 ↓確定条件  
 ・原因・理由(〜ので) …ア  
 ・恒常条件(〜いつも) …エ  
 ――線部はエと同じで、恒常条件を表す。

## 紀行 奥の細道

P5  
P9

## 【旅立ち】

## 【解答】

- 【一】 ①はくたいのかかく ②こそ ③いおり  
 【二】 ①永遠の旅人 ②やがて  
 ③〜とすぐに ④時節 ⑤三月二十七日  
 ⑥ほんやりと ⑦うすらいでいるけれども  
 ⑧親しい人々の全て  
 【三】 船頭や馬方  
 【四】 ①例ちぎれ雲が風に誘われて流れていくように  
 ②例春になり霞が生じている空を見ているうちに  
 【五】 ア

ぬ」という状況だったので、豊かになったのである。

【十】 「それ」は、現代文と同様、直前または比較的近い前の部分を指すことが多い。ここでは  
 ①「もと光る竹」(18・3)を見つけて不思議に思っている、近寄る。  
 ②近寄って、見ると、竹の筒の中が光っている。  
 ③「それ」を見ると……

と、竹の細部へ視線が移動していくので、「それ」は、竹の「筒の中」だと考えられる。「うつくしう」は【二】③で見たように「かわいらしい」と訳す。

【十一】 「養はす」は、動詞「養ふ」の未然形+使役の助動詞「す」。アは「遣はす」、エは「おはす」で一語の動詞。イの「す」は動詞の未然形に接続しており、「〜させる」の意なので使役の助動詞。ウの「す」は、サ行変格活用動詞。

## 【かぐや姫の成長】

## 【解答】

- 【一】 ①あしく ②あてなる  
 【二】 ①容貌・容姿 ②清らかで美しい  
 ③宴会を開いて楽しむ ④盛大に  
 ⑤身分が低い ⑥思い悩む  
 【三】 ①(1)ク (2)連体  
 ②(1)サ行変格 (2)連用  
 ③(1)ナリ (2)連体  
 【四】 ①ウ ②エ ③ア  
 【五】 ウ  
 【六】 イ  
 【七】 ウ

【六】 ①月日 ②道祖神

【七】 (例)股引の破れを修繕し、笠のひもを付け替え、三里に灸を据え、住んでいた草庵を人に譲って、杉風の別荘に移り住んだ。

【八】 ウ

【九】 (例)またいつ見ることができたらだろうか

【十】 (例)過ぎ去っていく春を惜しむ気持ちと、親しい人々との別れを寂しく思う気持ち。

【十一】 ウ

【十二】 ①エ ②イ

【十三】 (1)①宗祇 ②李白 ③西行 ④杜甫  
 (2)旅・枯野

## 【解説】

【一】 ⑦動詞「をさまる」の已然形+存続の助動詞「り」の連体形+逆接の接続助詞「ものから」。⑧「限り」は「全部・全て」の意。

【三】 舟や馬は当時の主要な旅の手段であった。  
 【四】 ①「の」は主格を表す。「片雲の風に誘はれて」は後の「漂泊」の様子を表現したものの。②「春立てる」と「立てる霞」との掛詞になっている。この句は、後の「心を狂はせ」にかかる。

【五】 「江上の破屋」は「川のほとりのあばら家」の意で、芭蕉が当時住んでいた庵のこと。「海浜にさすらへ、」(79・4)は須磨や明石などを旅したことを表しており、長く留守にしている間に家は蜘蛛の巣だらけになり、久しぶりに帰宅してそれを払っているのである。

【六】 本文中の対句的表現は次のとおり。  
 月日は百代の過客にして、  
 行きかふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯を浮かべ、  
馬の口をとらへて老いを迎ふる  
そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、  
道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、

【七】「白河の関越えんと、」(79・5)、「松島の月まづ心にかかりて、」(80・1)の後に着目。

【八】草庵を出ていく際に詠まれた句である。「草の戸」は自分が一人で住んでいた粗末な草庵を表す。一方「雛の家」は、この家が新しい住人を迎えた後の様子を想像したもの。

【九】直前の「上野・谷中の花の梢、」とのつながりをふまえ、「またいつかは」の後に「見ん」などの語を補う。「かは」は疑問を表す係助詞。

【十】「行く春」には、「過ぎ去る春」の意と、「自分が旅立っていく春」の意とがこめられている。春を惜しみ、人々との別れを惜しんで流す自らの涙を、鳥や魚に託して表現している。

【十一】旅へのあこがれや期待が感じられる前半に對し、後半は「心細し。」「胸にふさがりて、」「離別の涙」など惜別の感情が目立つ。アの「客観的に描写」、イの「旅を決めるに至った経緯」「重層的」「エの「価値観」「旅の目的」などは不適切。

【十二】①は八行下二段活用動詞「迎ふ」の連体形「迎ふる」の一部。②は完了(存続)の助動詞「り」の連体形。アは自発の助動詞「る」で、未然形接続。イは②と同じ。ウは形容詞「はかなし」の連体形「はかなかる」の一部。エはヤ行下二段活用動詞「思ほゆ」の連体形「思ほゆる」の一部。動詞の一部ということで、①と同じ。オは尊敬の助動詞「る」の連体形「るる」の一部。

尾+接続助詞「て」。

【白河】

【解答】

【一】①待ち遠しい・もどかしい ②つて

③詩文を作り楽しむ人

【二】イ

【三】夏

【四】イ

【五】(1)例何とかれて都へ知らせたい

(2)ウ・オ (3)理なり

【六】対句

【七】卯の花・茨の花

【八】(1)切れ字

(2)例道ばたに咲いている卯の花をかざしにして、関越えにあたっての晴れ着としよう。

【九】(例強意の係助詞「ぞ」の結びの語が省略されている。

【解説】

【一】①形容詞「心もとなし」の連体形。「心もとなし」は、⑦もどかしい・待ち遠しい、④不安だ・気がかりだ、⑨ぼんやりしているという意味がある。ここではなかなか目的にたどり着かない日々の気持ちを表しているのが、⑦の意味である。②「便り」は、よりどころ・手段・つて・手紙など、さまざまな意味があるが、ここでは都へ伝えるつて(縁故、特別なつながり)といった意味。③「風騷」は、⑦詩作や作文、④詩文を楽しむ風流という意味がある。ここでは、「ゝの人」に続いているので、④の意味である。

【十三】(1)宗祇は室町・安土桃山時代の連歌師、西行は平安時代後期の歌人、李白と杜甫は中国盛唐の詩人。本文冒頭の「月日は百代の過客にして、」は②の表現をふまえたもの。④は杜甫の「絶句」の一節。

【那須野】

【解答】

【一】①目当てにする ②そうはいってもやはり

③優雅である ④そのうちに

【二】①打消の助動詞「ず」の連体形

②完了の助動詞「ぬ」の終止形

③断定の助動詞「なり」の連体形

【三】エ

【四】(例野を抜けて行きたいので、放し飼いにされている馬を貸してほしいということ。

【五】(1)どうしたらよいか。(2)イ

【六】(例慣れない旅人は道を間違えてしまうでしょう。

【七】ウ

【八】エ

【解説】

【一】②「さすがに」は副詞で、前の事柄を受けて、そこから予想される事とは矛盾する事柄を述べる場合に用いる。④「やがて」は時間的な隔たりがないことを表す語だが、近世以降はある程度の時間の経過を表すようになった。ここは、しばらく馬を走らせたと考えるのが妥当。

【二】①ラ行四段活用動詞「知る」の未然形に接続しており、体言・連体形に接続する断定の助動詞

【二】アはマ行下二段動詞「求む」の連用形に接続している。ウはマ行下二段動詞「改む」の連用形に接続している。エは尊敬の助動詞「る」の連用形に接続している。三つとも連用形に接続している。また、それぞれの「し」の下には、「も」理

「こと」と(＝引用を表す格助詞)と、体言に接続する語がある。したがって、「し」自体は連体形である。以上から、ア・ウ・エは過去の助動詞「き」の連体形。イは、上の「残」と単語として切り離すことができない。サ行四段動詞「残す」の連用形活用語尾である。

【三】「秋風」「紅葉」は、和歌に詠まれた作者の想像の情景である。作者の目の前に広がる風景には「青葉」「卯の花」「茨の花」などがあることから、夏だと判断する。

【四】白河の関へ到着するまでの作者が「心もとなき」(84・1)心境であったことをふまえて考える。白河の関へ到着し、古人の歌に思いをはせることで、「旅心(＝旅にひたる気持ち)」が定まったのである。

【五】(1)「いかで」は「何とかれて」という意味の副詞。「便りあらばいかで都へ告げやらむ今」日白河の関は越えぬと」という歌の一部分であることをふまえ、「伝えたい」という述語を補う。

(2)この歌には、①白河の関を越えたということと、②そのことを何とかれて都へ伝えたいということ、の二つが詠まれている。イ「自然の美しさ」については触れていない。また、次の(3)で見ると、「奥の細道」の作

「なり」(ここでは連用形で「に」となっている)があとに続いているので、打消の助動詞「ず」の連体形。②ラ行変格活用の動詞「侍り」の連用形に接続しており、文を言い切っているため、完了の助動詞「ぬ」の終止形。③体言「名」に接続しており、終止形およびラ変型活用語の連体形に接続する当然の助動詞「べし」があとに続いているので、断定の助動詞「なり」の連体形。なお、こうした文法的な判断を行うと同時に、①「知らない」②「貸した」③「名である」と訳して意味が通ることを確認する。

【三】ア・イ・ウは主格、エは連体修飾を表す。

【四】「嘆く」は「嘆願する」の意、「寄る」は「近寄る」の意。道を尋ねただけとも考えられるが、「そこに野飼ひの馬あり。」(82・6)と、まず馬に目を留めていることから、馬を借りることが念頭にあってはいるのである。

【五】(1)「べき」は、ここでは適當の意。

(2)「いかがすべきや」と芭蕉たちの身になって親身に考えているので、ア・ウは不適。「されども」という逆接の接続詞に続けて、道に迷うことを心配していることから考える。

【七】男が、「うひうひしき旅人の道踏み違へん」ことを考えて、「あやし」と感じているのである。

【八】「小姫にて」は「小さな女の子であつて」という意で、「にて」は、断定の助動詞「なり」の連用形+接続助詞「て」。エもこれと同じ。アは手段を表す格助詞「にて」。イは時間を表す格助詞「にて」。ウは形容動詞「まことなり」の連用形活用語

者は、奥州への旅路に思いをはせるなかでこの歌に共感をもっている。したがって、ア「悲嘆」エ「絶望」といった激しい負の感情は適切とはいえない。

(3)歌を引用した直後に「理なり」と自身の感想を述べている。「理なり」とは、もともとなことである、という意味。

【六】「秋風」と「紅葉」、「耳に残し」と「面影にして」が対応する表現として並べられている。一方は聴覚的に、もう一方は視覚的に、古人が見た白河の関の情景を表現している。

【七】実際の季節は夏なので、雪のように見える白いものは何かと考える。

【八】(1)切れ字は「や」「かな」などがあり、余韻を残す・強調する・リズムを生み出すなどの効果がある。

(2)昔の人たちは、白河の関所を越えるときには「冠を直し衣装を改め」(84・5)といわれていたことをふまえた句。自分は晴れ着などを持ち合わせていないので、せめて卯の花をかざしにして代わりとしようというのである。「かざし」とは、正装した際に冠に季節の花や造花を挿して飾りとするもの。

【九】「ゝとぞ。」は、引用を表す格助詞「と」に強意の係助詞「ぞ」がついた形。係助詞「ぞ」があるので、下には連体形の述語がくるはずだが、ここでは省略されている。この形の場合、省略されているのは「言ふ」「聞く」などである。

【立石寺】

【解答】

- 【一】 ①寺を開くこと ②清らかで静かな様子
- ③すばらしい景観でひっそりと静かな様子
- 【二】 ①マ行下二段 ②ヤ行上二段
- ③サ行変格
- 【三】 尾花沢から立石寺までの間
- 【四】 約二十八キロメートル
- 【五】 岸を巡り、岩をはひて、
- 【六】 イ

【解説】

- 【一】 ①終止形は「勸む」。②終止形は「老ゆ」。活用の行に注意。③拝むことを意味する「拝」に「す」がついた複合動詞。
- 【四】 一里は約四キロメートル。
- 【六】 「閑かさ」と「蟬の声」という一見矛盾する内容が融合しているのがこの句の特徴である。

評論 山吹の花

P.10  
P.11

【解答】

語句・文法を理解しよう

- 【一】 ①例前もって準備する ②例恥をかくようだ・体裁が悪い ③例中途半端に
- 【二】 ①ある・ウ ②けむ・ア ③けれ・イ ④ける・イ
- 【三】 ①例手に取ることができずにいたので ②例もし伊勢大輔がいなかったならば、恥となるようなことだったなあ
- 【四】 ①謙讓語・伊勢大輔 ②謙讓語・伊勢大輔 ③尊敬語・上

文章の内容を読み取る

- 【三】 若い女房たちが応えられずにいたので、宮が伊勢大輔に伝えるように命じている。道信の中將の「くちなし」に合わせて、「えもいはぬ(何ともいえない・言葉にならない)」と表現している。
- 【四】 「疾し」は、素早いこと。ここでは、伊勢大輔が「一間がほどを、あざり出でける」(88.6)間に、道信の中將の歌に上手に応えたことを評している。
- 【五】 最後の段落、特に最後の一文に筆者の考えが述べられている。
- 【六】 枕詞と序詞は、どちらもある語句を導く働きがあるが、枕詞は装飾的で、それ自体の意味は薄い。一方序詞は、和歌の意味にも関わるものである。

故事成語 朝三暮四

P.12

【解答】

- 【一】 ①よ ②また ③には ④また
- ⑤あた ⑥なんぢ ⑦か
- 【二】 ①やがて・まもなく ②おまえ
- 【三】 ア
- 【四】 イ
- 【五】 ①まさにそのしよくをかざらんとす。 ②まもなく食料が乏しくなってしまうたから。 ③だまして・欺いて ④猿たちが自分になつかなくなることを心配したから。
- 【七】 エ
- 【八】 狙公：巧みな言葉で人をだますこと。 狙：目の前の相違や利害にとらわれて、実際は結果が同じであることに気づかないこと。

【解説】

1 山吹の花

- 【1】 (例)「くちなし」に、黄色の染料となる植物の「梔子」と、無言の意の「口無し」が掛けられている。
- 【2】 (例)この花を、何度も何度も染料につけて、素晴らしいくちなし色に染めてしまったので、くちなしと言うとおり、(その素晴らしい)私はそのもと言えないのです。
- 【3】 (1)伊勢大輔 (2)例なるほど、これは何ともいえない美しい花の色ですね。
- 【4】 ウ
- 【5】 (1)例その人の天性に応じて詠むこと。 (2)例中途半端に長く考えると、かえって詠みぶりが悪くなってしまうこと。
- 【6】 ①オ ②エ ③ウ ④ア ⑤イ

【解説】

語句・文法を理解しよう

- 【一】 ①「まうく」は、漢字で書くこと「説く」。前もって準備する意。②シク活用形容詞「恥ぢがまし」の連用形。名詞の「恥」に、接尾語「がまし」がついて形容詞となったもの。③ナリ活用形容詞「なかなかかなり」の連用形。「中途半端だ」の意。
- 【二】 係り結びは、係助詞が含まれる一文の文末にある活用語が、その係助詞を受けているときに成立する。係り結びが成立しているとき、文末の活用語は、係助詞「ぞ・なむ・や・か」に対しては連体形、「こそ」に対しては已然形になる。①は「なにもしないで通り過ぎることがあろうか、いや

ない」という反語を表す。②は「初めから準備していたのであろうか」という疑問を表す。「やか」は、疑問にも反語にもなるので、文脈から適切な解釈をしなければならない。

【三】 ①副詞「え」は下に打消の語を伴って「〜でない」という不可能の意を表す。また、接続助詞「ば」が、過去の助動詞「けり」の已然形に接続しているので、「〜かったので」と、理由を表すように訳す。

②「まし」は反実仮想の助動詞。「ましかば〜まし」の形で用いられる場合が多い。「もし〜ならば、〜だったらろうに」と訳す。

【四】 ①「候ふ」は「お仕えする」意の謙讓語。ここでは、中宮に伊勢大輔がお仕えしていること。②「承る」は「引き受ける」意の謙讓語。動作主は、宮(＝中宮彰子)の「あれ取れ。」という命を受けた人物なので、伊勢大輔。③「言ふ」の尊敬語「仰す」に尊敬の助動詞「らる」がついており、尊敬語。二重に敬語が用いられた最高敬語の形である。動作主は直前の発言をした「上(＝天皇)」である。

文章の内容を読み取る

- 【1】 道信の中將が山吹の花を持って通りがかったときに女房たちが言った言葉であることから考える。
- 【2】 掛詞とは、同音異義語を用いて、一つの語に複数の意味をもたせる修辭法である。ここでは、「くちなし」に「梔子」と「口無し」を掛けて、山吹の花の色と、ものが言えないという意味を表している。掛詞が含まれた歌の口語訳は、まずそれぞれの意味で訳し、その二つをつなげるようにするとよい。

- 【一】 ①は可能を表し、「〜できる」と訳す。不可能を表すときには「不能(あたはず)」と、読み方が変わる。②は「〜も同様に。」の意。「又」も同じ読み方だが、「その上。」という添加の意味になる。⑤は、ここでは「あたえる」の意。「与」はこのほかに、「とも」 「くみス」なども読み、さまざまな意味を表す。⑥は二人称の代名詞で、「あなた・お前」と訳す。漢文ではこの字を「若い」という意味では用いない。⑦は、ここでは疑問を表し、「〜か」と訳す。
- 【二】 ①直後の置き字「而」が「俄カニシテ」の「シテ」にあたり、順接の働きをしている。②【一】⑥で見たように、二人称の代名詞である。ここでは狙たちを指すので「おまえ」などと訳すとよい。
- 【三】 「得」は本文中では「理解している。」の意であり、「解意」と「得心」はともに「気持ちを理解する。」と解釈する。狙公と狙はお互いの気持ちを理解し合っているもので、エの「互いに反目して」は適切でない。また、両者の関係は、狙公が狙たちを養っているというもので、イの「仲間意識」は適切でない。さらに、気持ちを理解し合っていることが直ちにウの「親子のような親密な関係」を意味するとはいえない。最も適切なのはアである。
- 【四】 文末にある「焉」は強調や断定を表す。置き字として扱うため、訓読するときには読まない。疑問や反語を表す「焉」は文頭や文中にあり、「いづクンゾ」(どうして)、「いづくニカ」(どこに)と読む。
- 【五】 ①再読文字「將」は「これから〜しよう」とす

ら考える。「朝三暮四」は、狙公の立場からの意味と、狙の立場からの意味の二つの意味で用いられる故事成語である。

### 故事成語 管鮑之交

P.13

#### 【解答】

- 【一】 ①あざな ②かつ ③みづか ④あた
- ⑤もつ ⑥はか ⑦い ⑧なり
- 【二】 ①例成人したときにつける呼び名。
- ②例昔
- ③例欲張り
- ④例逃げる
- 【三】 ①嘗て鮑叔と賈す
- ②例管仲は、昔、鮑叔と一緒に商売をした。
- 【四】 鮑叔不<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>愚<sub>一</sub>
- 【五】 ウ
- 【六】 (1)例私を生んでくれたのは父母で、私を理解してくれるのは鮑叔である。  
(2)ウ

#### 【解説】

【一】 ③「自」は、「みづから(自分で)」と読む場合と、「おのづから(自然に)」と読む場合がある。ここでは、管仲が商売の利益の取り分を自分で多くした、という意味なので「みづから」。④「与」は、「あたふ(与える)」の他に、「与<sub>二</sub>鮑叔<sub>一</sub>」(116. 1)のように、返読して「〜と」読む場合もある。⑤歴史的仮名遣いでは、「もつて」とし、「つ・や・ゆ」などの小さい仮名は用いない。⑧「也」は文末に置かれて断定や強意を表す。ここでは「なり」と読むが、命令文などの場合は置き字となる

#### 【二】

- ①な ②もつ ③よ ④とも
  - ⑤とも ⑥すす ⑦しめ ⑧つか
  - ⑨いにしへ ⑩し ⑪か ⑫いは
  - ⑬ま ⑭あ ⑮お
- 【二】 ①へりくだった言葉遣いをする  
②〜によって ③仕返しをする ④せひ  
⑤教える(示す) ⑥〜することになる  
⑦招く ⑧仕える

#### 【三】

①孤極めて燕の小にして以て報ずるに足らざるを知る。 ②工

#### 【四】

①イ ②世話役の者に千金を持たせて、千里の馬を買に行かせた君主がいた。 ③ウ  
先生：(郭) 隗 之：可者

#### 【五】

①一日に千里を走る名馬が欲しかったのに、使いの者が五百金もの大金を出して死んだ馬の骨を買ってきたから。

#### 【六】

②理由にあたる部分：死馬且買之。況生者乎。馬今至矣。理由の説明：例死んだ馬でさえ大金で買ったのだから、生きた馬ならなおさら大金で買ってくれるだろうと世間の人々は考え、千里の馬は自然とやってくると思えたから。

#### 【七】

##### ア

①隗：死馬(死んだ馬) 賢<sub>ナル</sub>於隗<sub>ヨリ</sub>者：千里馬(生者)(生きている千里の馬)  
②まず、私、隗から厚遇することを始めてください、ということ。  
③まして隗より賢い者が、どうして千里の道のりを遠いと思うだろうか、いや、遠いと思わない。(遠いと思わずにやってくるのだら

こともある。この他、「や」と読んで疑問・反語を表す場合などもある。

【二】 ①「字」は、男子が成人した際に、実名とは別につける呼び名(女子は婚約したときにつける)。これに対して、実名を「諱」という。その人の親、君主、師以外の者が呼ぶときは、名を言わず字を言うのが礼儀である。③「貪」は、訓読みすると「むさぼる」。現在でも「貪欲」などの熟語で用い、欲張りの意を表す。④ここでは「走る」という意味ではなく、「逃げる」の意。「敗走・逃走」などの熟語でも用いられる。

【三】 ①漢文を書き下し文にするときは、主に、①返り点に従って語順を並べかえる。②送り仮名と助詞・助動詞に当たる語などを平仮名にする。③置き字は書かない。の三点に注意する。ここでは、「与<sub>二</sub>鮑叔<sub>一</sub>」の部分で、返り点に従って語順が変わり、「与」が助詞に当たるので、「鮑叔」となることに注意する。②「鮑叔」とあるが、鮑叔と誰が商売をしたのが明確でないので、本文の内容から「管仲」を補う。

【四】 「訓点」とは、返り点と送り仮名(場合によって句読点なども含む)のこと。返り点をつけるには、読みを参考にして、白文の漢字をどの順番で読むのかを考える。ここでは、  
鮑叔 不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>愚<sub>一</sub>

となる。④「愚」から、すぐ上の⑤「為」へ返るので、⑤に「レ」をつける。さらに、⑤から⑥「不」へは、間に「以」があるので、⑤に「一」、⑥に「二」をつける。⑤には「レ」と「一」がつくことになるので、組み合わせで「レ」にする。送り

#### 【九】 ウ

#### 【解説】

【一】 ⑥「雪ケ」は「雪辱(恥をすすいで名誉を挽回する。)」の意。ちなみに、よく「雪辱を晴らす」という言い方をするがこれは誤り。正しくは「雪辱を果たす」。⑧ここでの「事フル」は「仕える」の意。⑮置き字でない「於」は「おいて」と読む。「そこで、それで」という意味。

【二】 ⑥「得」は、ここでは「〜する必要がある」という意味。⑧「師事」は現代語で用いられている意味と同じで、師(ここでは「郭隗」)に対する尊敬の念を含んでいる。

【三】 ①「不」は、平仮名で書き下す。②「孤之國(我が国)」とは燕であり、仕返しをしたい国は斉であることを正確に捉える。

【四】 ①まず上の一点、次に下の二点、次に上の二点に従って読み、それから上・下点に従って読む。②使役の句法「使<sub>二</sub>A<sub>一</sub>B」に注意。「AにB(を)させる。」と訳す。ここでAに当たるのは「涓人」、Bに当たるのは「求<sub>二</sub>千里馬<sub>一</sub>」。この文の主語に相当する「者」とは直前の「古之君」である。③ウ「召」が使役の働きをもつ漢字であり、「学者の臣下を呼び寄せ、書物を講義させる。」という訳になる。「召」の他に「命・招・詔」などもある。なお、アは「どうしても告げないわけにはいかない。」という二重否定、イは「各々が自分の宝を大事に持っているのがよい。」という比較、エは「松や柏が砕かれて薪となる。」という受身を表す。

【五】 「可者」とは、燕の国力をつけ、国政を一緒

り仮名は、漢字の読みに合わせてつけるが、「不」が助動詞「ず」に当たることに注意する。

【五】 直後に「知<sub>二</sub>仲有<sub>一</sub>老母也」と、理由が書かれている。中国の思想、特に儒教の考え方で父母によく仕えること、すなわち「孝(親孝行)」は、非常に重要視される。管仲は、戦場で命を失えば、老いた母親に孝養を尽くすことができないので逃げたのである。鮑叔はそうした事情を理解していたので、管仲が逃げ出しても臆病者とは思わなかったのである。

【六】 商売の利益の取り分を自分に多くする、計画が失敗して行き詰まる、戦場で何度も逃げ出す、という管仲の行動は、それだけを見れば、欲張り、愚か、臆病と批判されそうなのである。しかし、鮑叔はその行動の真意、あるいは真の原因を見きわめ、管仲を批判することがなかったのである。したがって、ここでの「知」は、単純に、知り合いだであるとか、見知っているとといった意味ではなく、「理解している」という意味である。「父母」は、自分をこの世に生み出してくれた最も敬愛すべき存在であるが(【五】の「孝」の解説も参照)、管仲はその父母と鮑叔を並べて述べている。ここに、管仲が鮑叔を父母同様に敬愛していたことが表れている。「生我者父母」と「知我者鮑子」は、内容の上でも、文の構造の上でも似た形をとっている。このような表現は「対句」といい、漢文にしばしば見られるものである。

### 史話 先従隗始

#### 【解答】

P.13  
P.14

に行うにふさわしい人物のことである。

【六】 ①「以<sub>二</sub>千金<sub>一</sub>」求<sub>二</sub>千里馬<sub>一</sub>」が「君」の意図であり、「買<sub>二</sub>死馬骨<sub>一</sub>返。」という結果が、この意図に反していたから「君怒。」となったのである。②「」の内容が「涓人」の考えと行動の理由に相当する。なお、この文は「A且B。況C乎(「AでさえBである。ましてCならばなおさらBだ。)」という抑揚の句形が用いられていることに注意。

【七】 設問の「矣」は断定の働きである。イ「乎」は「や」と読み、「どうして区別できようか、いや、できない。」という反語を、ウ「也」は「や」と読み、「何と楚人の多いことか。」という詠嘆を、エは「而已矣」で「のみ」と読み「先生の道は真心と思いやりだけです。」という限定を表す。アは「朝に真実の道聞くことができれば、(その日の)夕方に死んだとしても悔いはない。」という意味である。

【八】 ③「A<sub>二</sub>於B<sub>一</sub>(「BよりもAだ。)」という「比較」と「豈A<sub>一</sub>哉(「どうしてA(しよう)か、いやA(し)ない。)」という「反語」の二つの句形に注意。また「況」は「まして」と訳せばよい。

【九】 「士」が「兵士」ではなく「賢者」を指すことを捉えれば、「争」が「戦」ではなく「先を争つて」の意味であることが理解できる。

# 高等学校 国語総合【改訂版】指導書・教材類のご案内

 = データまたは音声でのご提供です。  = 冊子でのご提供です。

## 指導書

指導書		現代文編	古典編
セットで同梱	指導資料		
	発問例集		
	ワークシート (構成・内容理解、語句・漢字学習、古文品詞分解、漢文書き下し文、古典口語訳)		
	基本テスト		
	評価問題		
	実力問題		
	補充教材		
	教科書原文		
	朗読 CD		
	漢文エディタ	—	
	学習課題ノート		
教師用教科書			
本体価格(予価)	¥15,000	¥11,000	

※「発問例集」の内容は「指導資料」にも含まれています。

※「現代文編」「古典編」で別売になります。

## 指導書別売品

教師用教科書	 ¥3,000	 ¥3,000
--------	---	---

※指導書セットの「教師用教科書」と内容は同じです。

指導資料 PDF 版	 ¥5,000
------------	---

※指導書セットの「指導資料」の紙面を PDF ファイルにしたものです。

※「現代文編」「古典編」が一つになっています。

## 生徒用教材(採用品)

学習課題ノート	 ¥500	 ¥500
---------	---	---

## デジタルテキスト

指導者用デジタルテキスト		
学習者用デジタルテキスト		

※指導書・教材類は現在編集中のため、内容・仕様等については変更する場合があります。

※価格はいずれも本体価格(予価)です。

予価(本体500円+税)

## 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14  
☎03-3230-9411(編集)・9412(営業)

### 大阪支社

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3  
☎06-6341-2177

### 名古屋支社

〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル 4F  
☎052-252-9211・9212

### 九州支社

〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1  
☎092-531-1531・1532

### 札幌営業所

〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル 3F  
☎011-616-8722

## 三省堂版準拠

高等学校  
国語総合  
古典編 [改訂版]

# 学習課題ノート

ご採用  
見本  
ダイジェスト  
版

年 組 番 氏名